

エピクロスの子のよう

桑田光平著

『ロラン・バルト——偶発事へのまなざし』

水声社 二〇二二年十二月

『サド・フリーエ・ロヨラ』で、ロラン・バルトは他ならぬ自らの生が未来の伝記作者によつて書かれる機会の訪れに際して、この伝記作者がバルトの生をいくつかの《伝記素》に還元し、「それぞればらばらに動く《伝記素》は、あらゆる運命から逸脱して飛び回り、エピクロスの原子のように、何らかの未来の身体に——それもまた散乱することを約束されているが——達することができるのであろう」という願望を記述するとき、運命という統一性に集約されえず、全面的な散逸性の徴を帯びた《伝記素》とは、バルトの生に降りかかってくる雨の原子のようなものかもしれない。それも、均等な垂直落下の無数の原子に生じるかもしれない。小さな偏向のゆえに生起する遭遇の刻印としての。この連合関係を保証するのは、改めて指摘するまでもなく、「エピクロスの原子のように」という記述なのだが、この連合関係はさらに《偶発事》というもうひとつの語へと押し広げられていくはずだ。というのも、ピエール・ロティの『アジャデ』をめぐって書かれたテクストで、この《偶発事》という語を、ごく端的に、それは「ただ単に、一枚の葉のように、人生という絨毯の上にそつと落ちてくるものでしかない。それは、日々が織りなす織物につけられた折り目」

襞であり、ほとんど書き留めることのできないもの、記述のゼロ度でもいえるもの、何かを書くために必要とされるだけのものである」と定義しているからである。この、日々の生のさまざまな局面で降りかかってくるもの、とはいえ、記述対象になりがたく、また記述できたとしてもそれが何に對して開かれ、何に對して必要とされるかが少なくとも記述の時点では判然としない小さな出来事としての《偶発事》は、驟雨の突然の開始の予兆が、被覆されていない皮膚の最小面積の一点が接触した原子状の雨滴によつてもたらされたように、私の身体とこの落下する滴との遭遇という刻印を局所化しえぬままに私の身体に刻印するかもしれない。

ところで、この「エピクロスの原子」がその垂直落下の際に生じさせる偏向に關していえば、バルトと同時代を共有したミシエル・セールの『ルクレティウス、物理学の誕生』が主題化した対象であるが、ここでは、もうひとつの興味深い反応の例として、同じくバルトと同時代人であつたルイ・アルチュセールの『哲学について』に収録されている「哲学とマルクス主義——フェルナンダ・ナヴァロとの対話」に注目してみることしよう。ここで、アルチュセールは偏向、つまりクリナーメンが原子の逸脱を引き起し、隣の原子との遭遇を引き起し、この遭遇の連鎖から世界が誕生すると指摘したうえで、さらに、興味深い点は、この偏向の概念を、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の「世界とは到来するものすべてである」という命題に引き寄せてみたことである。というのも、このヴィトゲンシュタインの命題のドイツ語を字義通りに直訳すれば、「世界とは上からわれわれに落ちてくるものすべてである」となることから、ここにエピクロスの原子の運動との隣接性を見出しえるからだ。さらに、アルチュセールがこの命題のラッ

セル学派の英語訳、「世界とはケースであるところのすべてのものである」を参照し、世界には降りかかってくる相互に異なる特異な個物でしかありえないケース、事例しか実在しない点を強調している。

この思考のイメージをさらにラッセルを媒介として、ブルームズベリー・グループの知的交流の場面にも見出すことができるかもしれない。たとえば、ヴァージニア・ウルフの「現代小説」（一九二九年）と題された批評的なテキストで、より正確に言えば書かれるべき小説の形態を宣言的に展開するにあたって、小説家たちによって遵守されてきた一般的な規範を廃棄し、「われわれの心に落ちてくる諸々の原子を、その落ちてくる順序どおりに記録し、よしや外見はいかに支離滅裂であろうと、それぞれの光景あるいは事件が意識に刻み付ける模様をたどつてみよう」と書くとき、ここでも小説という形式を保証する約束の体系を消滅させ、いま一度世界をその発生状態から書き換える努力、またその実践を小説の可能な形式とするこの視点は、誤解を恐れずにいえば、アルチュセールが「偶然性の唯物論」として書き換えようとした哲学の実践と決して遠い地点の物語ではない。そして、ロラン・バルトが自らの講義を「小説」ではなく「小説の準備」と名づけることを選択した思考の形態もこの文脈に合流するものではなかっただろうか。

途方もなく明晰な市田良彦氏の『アルチュセール ある連結の哲学』（平凡社、二〇一〇年）を参照しながらいま一度アルチュセールに戻ってみれば、クリナーメンは「すべての状況の雛形、純粹形」であり、アルチュセールが組み立てるこの状況の理論とは、「現に〈かくある〉ことで明日もまた〈かくあるだろう〉」と思わせ

る既成事実、世界の〈はじまり〉を押し付けてそれを平行落下しうる〈雨〉に解体するという戦略だった。構造化された全体に、構造の無を差し向ける策略だった」ということになる。そして、上記の『哲学について』の末尾近くで、アルチュセールが「マルクス、レーニン、グラムシの思想につきままとっている哲学は〈非哲学〉である哲学、すなわち哲学の形式で生産されるのを止める哲学でなくてはならない」と書くとき、たとえば、この「哲学」という項に文学、あるいは小説という項を代入してみれば、バルトの偶発事の記述の試みの地平が浮かび上がってくるとはいえないだろうか。

この降りかかる原子の雨をめぐる思考の系列の記述は、桑田光平氏のきわめて巧妙に組織された美しい著書、『ロラン・バルト——偶発事へのまなざし』（水声社、二〇一二年）へのささやかな導入に他ならない。体系的に組織されたフランス語でのロラン・バルトに関する博士論文の執筆と同時期に開始されたこの著書を構成する文章は、まさしくバルトの読解作業のさなかに著者に降りかかってきた無数の小さな印象の原子を感受し、その散逸性に繊細に注目することから書かれたものである。そして、この偶発事との遭遇という事象への注目、開始をめぐる問い、写真と素描、断章形式と小説、セミナーにおける遭遇による衝突と変容の体験、これらいくつかの主題の相のもとに記述する試みとして、要約不可能なこの著作の非要約を提示しておくことにしよう。また、「書き留められたものは、モロッコの断片であると同時に〈私の断片である〉という一節は、偶発事に伴う小さな偏向が世界を出現させると同時に、非連続的な主体化の場所であることを示唆してくれるだろう。」

（松浦寿夫）